

館林市内遺跡発掘調査報告書

館林城跡（三の丸）（平11地点）

八方遺跡（平11地点）

加法師遺跡（平11地点）

北近藤第一地点遺跡（平11地点）

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

館林城跡（三の丸）（平11地点）

八方遺跡（平11地点）

加法師遺跡（平11地点）

北近藤第一地点遺跡（平11地点）

館林市教育委員会

例 言

1. 本書は平成11年度に館林市内で実施した遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。

平成11年度に実施した発掘調査は次のとおりで、地点名は平成11年度調査であることから、全て平11地点とした。

- ・館林城跡（三の丸） (33)
- ・八 方 遺 跡 (18)
- ・加 法 師 遺 跡 (39)
- ・北近藤第一地点遺跡 (53)

2. 発掘調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教 育 長 大塚文男

教 育 次 長 笠原 進

主 管 課 文化振興課

文化振興課長 今井 敏

文化財係長 阿部 博

学 芸 員 岡屋英治（担当） 岡屋紀子 黒澤文隆（副担当） 原 幸恵

主 任 高橋一哲（調査補助）

嘱 託 長棟紀子 根岸良子 酒井友子

調 査 補 助 員 寺内景子

作 業 員 石井悦雄 大根田幸子 尾川邦代 大澤平八郎 荻野秀樹 川島範子 小林俊彦
小林浩子 坂田岩吉 高瀬 広 中島大輔 橋本嵩郎

3. 調査に係る経費は、国および群馬県より補助を受け館林市が負担した。
4. 調査によって出土した遺物、調査記録および資料は、館林市教育委員会が保管している。
5. 本書のとりまとめは、岡屋（英）、寺内、川島、小林が中心となって行った。
6. 遺跡名の後に付けた（ ）内の数字は館林市の遺跡番号である。
7. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関のご指導、ご教示、ご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

〈目 次〉

例 言	
目 次	
図版目次	
写真目次	

第 I 章 館 林 市 の 環 境	1
第 1 節 地 理 的 環 境	1
第 2 節 歴 史 的 環 境	3
第 II 章 各 遺 跡 の 概 要	5
第 1 節 館 林 城 跡 (三の丸) (33) (平 11 地 点)	5
1. 立 地 と 環 境	5
2. 調 査 の 概 要	7
3. 出 土 遺 物	9
第 2 節 八 方 遺 跡 (18) (平 11 地 点)	13
1. 立 地 と 環 境	13
2. 調 査 の 概 要	15
3. 出 土 遺 物	16
第 3 節 加 法 師 遺 跡 (39) (平 11 地 点)	17
1. 立 地 と 環 境	17
2. 調 査 の 概 要	19
3. 出 土 遺 物	21
第 4 節 北 近 藤 第 一 地 点 遺 跡 (53) (平 11 地 点)	25
1. 立 地 と 環 境	25
2. 調 査 の 概 要	27
3. 出 土 遺 物	30
抄 録	33

〈 図 版 目 次 〉

第 1 図	館林の位置と調査遺跡	2
第 2 図	遺跡分布と調査遺跡	4
第 3 図	館林城跡（三の丸）周辺の遺跡	6
第 4 図	館林城跡（三の丸）（平 11 地点）調査区全体図	8
第 5 図	館林城跡（三の丸）（平 11 地点）出土遺物実測図（1）	10
第 6 図	館林城跡（三の丸）（平 11 地点）出土遺物実測図（2）	11
第 7 図	八方遺跡周辺の遺跡	14
第 8 図	八方遺跡（平 11 地点）調査区全体図	16
第 9 図	八方遺跡（平 11 地点）出土遺物実測図	16
第 10 図	加法師遺跡周辺の遺跡	18
第 11 図	加法師遺跡（平 11 地点）調査区全体図	20
第 12 図	加法師遺跡（平 11 地点）出土遺物実測図（1）	22
第 13 図	加法師遺跡（平 11 地点）出土遺物実測図（2）	23
第 14 図	北近藤第一地点遺跡周辺の遺跡	26
第 15 図	北近藤第一地点遺跡（平 11 地点）調査区全体図	28
第 16 図	北近藤第一地点遺跡（平 11 地点）出土遺物実測図（1）	31
第 17 図	北近藤第一地点遺跡（平 11 地点）出土遺物実測図（2）	32

〈 写真目次 〉

写真 1	館林城跡 (三の丸) 遺跡遠景	5
写真 2	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 調査地近景	7
写真 3	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 調査風景	7
写真 4	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 完掘状態 (2トレンチ)	7
写真 5	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 完掘状態 (3トレンチ)	7
写真 6	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 出土遺物 (輪宝墨書土器)	9
写真 7	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 出土遺物 (1)	12
写真 8	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 出土遺物 (2)	12
写真 9	館林城跡 (三の丸) (平11地点) 出土遺物 (3)	12
写真 10	八方遺跡 遺跡遠景	13
写真 11	八方遺跡 (平11地点) 調査地近景	15
写真 12	八方遺跡 (平11地点) 調査風景	15
写真 13	八方遺跡 (平11地点) 完掘状態 (3トレンチ)	15
写真 14	八方遺跡 (平11地点) 出土遺物	16
写真 15	加法師遺跡 遺跡遠景	17
写真 16	加法師遺跡 (平11地点) 調査地近景	19
写真 17	加法師遺跡 (平11地点) 調査風景	19
写真 18	加法師遺跡 (平11地点) 遺物出土状態 (2トレンチ)	19
写真 19	加法師遺跡 (平11地点) 遺物出土状態 (10トレンチ)	19
写真 20	加法師遺跡 (平11地点) 出土遺物 (1)	24
写真 21	加法師遺跡 (平11地点) 出土遺物 (2)	24
写真 22	加法師遺跡 (平11地点) 出土遺物 (3)	24
写真 23	加法師遺跡 (平11地点) 出土遺物 (4)	24
写真 24	北近藤第一地点遺跡 遺跡遠景	25
写真 25	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) A区調査地近景	27
写真 26	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) B区調査地近景	27
写真 27	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 調査風景 (A区)	27
写真 28	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 調査風景 (B区)	27
写真 29	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 遺構確認状況 (A-2トレンチ)	29
写真 30	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 遺構確認状況 (B-5トレンチ)	29
写真 31	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 遺構確認状況 (B-9トレンチ)	29
写真 32	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 遺物出土状態 (A-2トレンチ)	29
写真 33	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 遺物出土状態 (B-4トレンチ)	29
写真 34	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 出土遺物 (1)	32
写真 35	北近藤第一地点遺跡 (平11地点) 出土遺物 (2)	32

第I章 館林市の環境

第1節 地理的環境

館林市は、関東地方のほぼ中央部、関東平野の北辺に位置する人口8万人程の地方都市である。

「鶴舞う形の群馬県」のちょうど頭の部分にあたり、群馬県の東南部「邑楽・館林」地方と呼ばれる地域に位置している。

「邑楽・館林」地方は、東流する渡良瀬川、利根川にはさまれるようにしており、山国「群馬」のなかでは低地帯に位置している地域である。

館林市の市域は、東西約15km、南北約8km、総面積約61km²で、南は邑楽郡明和町をはさみ利根川を隔て埼玉県と、北は渡良瀬川を隔て栃木県と、東は邑楽郡板倉町をはさみ渡良瀬遊水池で茨城県と接しており、各都市との距離でいうと、県都「前橋市」までは約50km、首都圏とは東北自動車道で約60kmほどの距離にある。

本市の地形を概観してみると、その地形は、大きく「低台地」と「低地帯」とに分けられ、市域のほぼ中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺には「低地帯」が広がっている。

市内の標高は、最高32m、最低15mほどで、前述の「低台地」は標高20mの等高線をトレースするように広がっている。

この「低台地」は「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地で、主に下末吉期に相当する古東京湾の時代の堆積物によって構成されており、関東ローム層によって覆われ西から東へ緩やかに傾斜している。

台地の西辺に添って一段高く馬背状に、幅約500mほどの内陸河畔砂丘（自然堤防？鞍掛山脈などとも呼ばれる）が大泉町古海から館林市高根町まで延びており、本市の最高標高点はこの上にある。

「邑楽・館林台地」の北と南には、標高15mほどの低地帯が広がっている。この「低地帯」は利根・渡良瀬川の形成した「沖積低地」で、台地北の低地帯中には、微高地や自然堤防がめだち、南の低地帯には、池沼や湿地帯が発達している。

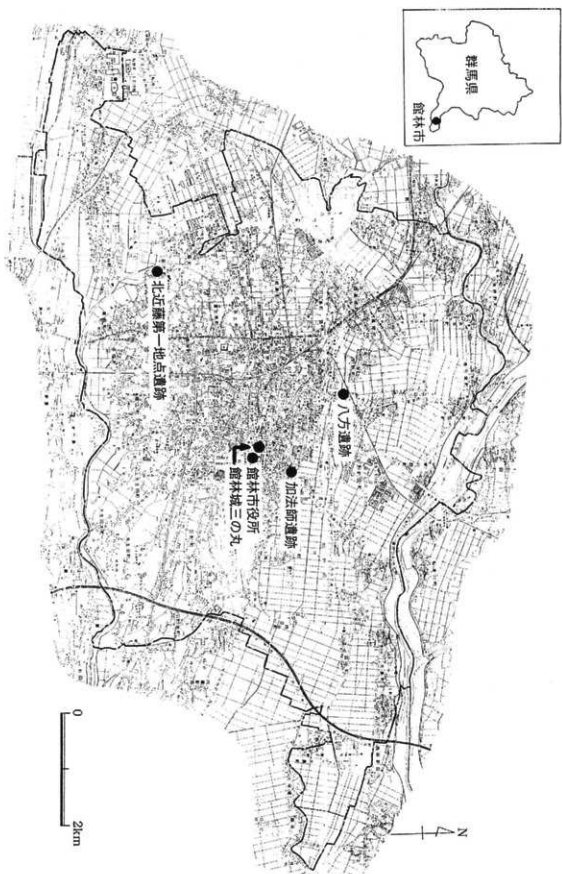
「低台地」と「低地帯」の比高差は平均して5m前後で、台地から低地へ移行する線は、台地の北側と南側で様相の違いがある。

台地の北側では、あまり沖積地からの浸食が見られず、崖線を作って台地から低地に移行するケースが多い。台地から一段低い微高地へと移り、一段のテラスをもって低地に移行するケースも見られる。

台地の南側は、よく浸食されている状況が観察され、その境界線は複雑に入り組んで沖積地に移行することが多い。大きな谷頭や小さな支谷が発達し、台地の奥深くまで入り込んでおり、上空から見ると樹枝状にわかれ、複雑な様相を呈する。

こうした谷の多くは、出口付近で堰き止められ、池沼や湿地を形成することが多く、「蛇沼」「茂林寺沼」「近藤沼」などの沼やそれを取り巻く湿地帯が、本市の特色ある景観を作りだしている。

この南側の台地と低地の境界線を複雑にしている要因の一つに、本市域が、関東構造盆地の北辺に位置しており、この造盆地運動が影響していると考えられている。



第1図 館林の位置と調査遺跡

第2節 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、144ヶ所あり、昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）に詳細が報告されている。

これによると、本市の台地上には旧石器時代から現代まで連続として、人間の生活の痕が残されている。分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりとなる。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみを採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0遺跡（弥生時代の遺物を採取できた遺跡1遺跡）、古墳時代から平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち、縄文時代の遺物も採集できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数は25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物の散布が見られるため、その中心となると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。

次に時代の変遷を地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

旧石器時代

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に添ってある鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上にその多くが確認されている。

縄文時代

この時代になると遺跡数が増えるとともに、洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状の台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数の減少が見られ、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向を見せ、後・晩期の包含層等は低地（沖積地）に及ぶ。

弥生時代

弥生時代の遺跡として確認されたものは無いが、微高地や台地の斜面等で、遺物等がわずかに確認されているにすぎない。

古墳時代

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に依っている。

中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦部へと移行する。後期には遺跡数の増大が見られ、台地上の平坦部に所在する場合が多い。

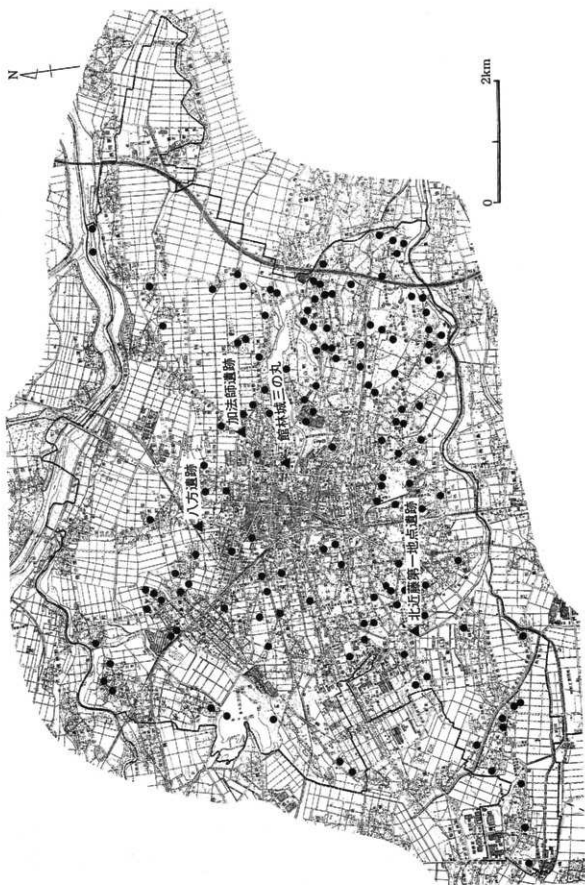
墳墓としての古墳は、25基が残存しているが、古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等を見下ろす洪積台地上に所在している。

奈良・平安時代

この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採集ができることから、この時代以降は台地上には普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

中世・近世

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



第2図 遺跡分布と調査遺跡

第Ⅱ章 各遺跡の概要

第1節 館林城跡(三の丸)(平11地点)

1. 立地と環境

館林城跡は、「館林市の遺跡」では館林城跡・城下町(33)として記載されている。

館林城は、沼を天然の要害として築かれた平城で、大きく分けて、城沼に突出する舌状台地を区切って縄張りされた牙城部、それを取り巻くように台地上に配置された武家屋敷街、その西側の台地上に広がる町屋街の3要素からなる。

館林城の牙城部(中心部)は現在の館林市役所を中心とする一帯で、「城沼」に突出する舌状台地を掘で区切り、土塁をもうけて囲ったもので、現在の向井千秋記念子ども科学館の周辺を本丸とし、その南に南廓(現在の市役所東広場)と二の丸(現在の市役所)、その西に三の丸(文化会館周辺)と梯郭式に配置されている。この牙城部の北から西にかけてのやや低い洪積台地上に、武家屋敷街が配置され、牙城部を取り囲んでいる。

城下町となる町屋街はさらにその西側の洪積台地上に広がり、現在の中心市街地と重なっており、町人街である町屋と武家街である武家屋敷とは、大手門によって分けられている。

さらに城下町の最も外周は、掘によって台地を区切り、土塁をつくり城下町すべてを囲い、五ヶ所の出入口をもうけ、牙城部、武家屋敷街、城下町を含めて守れるように縄張りされた堅固なものである。

館林城周辺の遺跡には、縄文時代の遺物が出土した大街道遺跡(31)、外加法師遺跡(144)、縄文時代の集落が確認された大袋Ⅱ遺跡(65)、縄文時代や古墳時代の遺物が散布した三軒屋遺跡(64 縄文・古墳)、縄文時代から平安時代の遺物が散布する岡野・屋敷前・岡遺跡(16)、古墳時代の集落が確認された八方遺跡(18)、古墳時代の住居跡が発掘された尾曳町1遺跡(40)、平安時代の遺物を散布する広内町1遺跡(35)、広内町2遺跡(36)、若宮遺跡(37)がある。

また、城下町と重なって、縄文時代、古墳時代の集落が確認された加法師遺跡(39)、縄文時代の遺物を散布する朝日町遺跡(34)、円墳と考えられている愛宕神社古墳(32)、古墳時代の遺物の散布する尾曳町2遺跡(62)、奈良から平安の遺物が散布する城町遺跡(38)が見られる。



写真1 遺跡遠景



第3図 館林城跡（三の丸）周辺の遺跡

2. 調査の概要

館林城跡三の丸の発掘調査は、館林市が計画した旧三の丸市民プールの解体及び周辺整備工事に伴う、試掘・確認調査である。

市では城沼市民プールの開設にともなって使われなくなった旧三の丸市民プールが老朽化し危険であること、文化会館の敷地である三の丸が、平成12年に開催される全日本花いっぱい大会の中心会場となることなどからプールを解体するとともに、花いっぱい大会の周辺会場として整備を図るものとして、平成11年度予算化された。

同地は、昭和30年代のプール建設時によって地下の遺構などは壊されているが、周辺には土塁が残っていることやプール以外ではまだ城の遺構等の残存の可能性があることなどから事前に試掘・確認調査をすることとなった。

調査は、工事予定地のうちプール部分を除いた部分に6m間隔で幅1mのトレンチ6本を設定し（北より1～6トレンチ）、重機で表土の排除を行うとともに、各トレンチを人力により土層を確認しながら掘り下げ、遺構・遺物の確認をおこなった。調査の結果、1・2トレンチの東部分で地表面から約20cmほどのところで玉石が並んでいる状況が確認されるとともに、各トレンチでは、粘土や焼土、カーボンを含んだ土の堆積が見られたことから注意深く各層ごとに掘り下げ、井戸7基、敷石状遺構1基、溝状遺構4基、木炭が充填された遺構1基のほか、多数の落ち込みや柱穴を確認した。井戸は全て素掘り、1・2・4トレンチでは溝状遺構を伴っている。敷石状遺構はやや浅い溝に拳大から頭大の玉石を敷き込んでおり、1トレンチと2トレンチでは90度ほどずれている。溝状遺構は深さ1mほどの規模を示し、断面は箱堀状、柱穴等は井戸や敷石状遺構や溝状遺構の周辺にまとまっている。出土物には、輪宝墨書土器や陶磁器類、瓦、釘等が出土した。



写真2 調査地近景



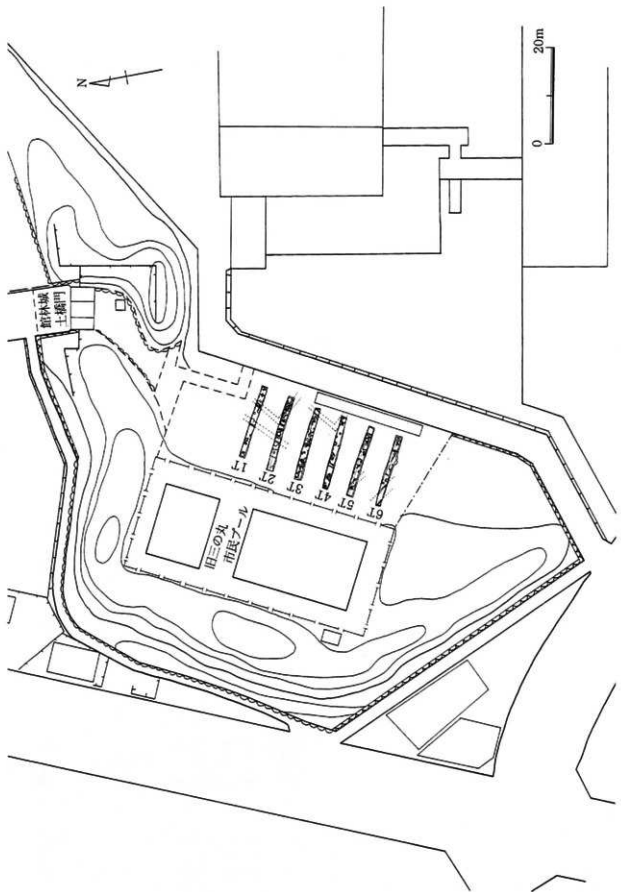
写真3 調査風景



写真4 完掘状態 (2トレンチ)



写真5 完掘状態 (3トレンチ)



第4図 館林城跡(三の丸)(平11地点)調査区全体図

3. 出土遺物

今回の調査において出土した遺物には、陶磁器類、瓦類、石類、釘等がある。

ここでは、その中の幾つかを取り上げた。

1つは輪宝墨書土器のほぼ完形個体である。土師質の土器で口径12.2cm、底径7.1cm、器高3.1cmを計る。器形は、底部はほぼ平らで、緩やかに内湾して口縁部に至る。焼成良好、胎土には粗砂粒を多く含む。内部に蓮花状の文様と梵字がみられ、建築儀礼などに用いられたと考えられている輪宝墨書土器である。底面は糸切り痕が残る。3トレンチ西側の井戸中より出土している。

2は墨書土器の3分の2個体。土師質の土器で、口径11.2cm、底径6.5cm、器高2.3cmを計る。器径は、底部が平らで緩やかに立ち上り口縁に至る。焼成は良好、胎土に粗砂粒を多く含む。色調は黄褐色。表面、内面に墨書がみられ、3トレンチより出土している。

3、4、7はスリ鉢の破片と思われる。

3は口縁付近の破片で、口径16.6cm、現高9.5cmを計る。底部よりほぼ垂直に立ちあがると考えられ、口唇部は平らである。内部に荒い溝がつけられている。2トレンチの井戸の周辺から出土している。

4は底部付近の破片。底径6cmを計る。内面全体に荒い溝が見られる。4トレンチ出土。

7も底部付近の破片。底径12.7cm、現高5cmを計る。内面に直線状、波線状の荒い溝が見られる。4トレンチ出土。

5、6は灯明皿である。

5は小型のもので、口径6.6cm、底径3.8cm、器高2.3cmを計る。やや厚ぼったい感じがし、手づくね。3トレンチ出土。6は口径9cm、底径4cm、器高3.4cmを計る。やや薄手で、内部は指ナデ痕が見られ、底部には糸切り痕がある。4トレンチの井戸から出土している。

8、9は軟質陶器の培格である。

8は口縁付近の破片。口径34.0cmを計ると考えられ、比較的大型で、浅い培格であろう。現高は4.5cm。口縁は平らで、内側に耳を持つ内耳土器である。1トレンチより出土している。

9は底部付近の破片。底径は29cmを計ると考えられ、比較的大型のもので、現高は3cm。底面はほぼ平らで、2トレンチの井戸周辺から出土している。

10と11は瓦の破片。

10は椀瓦で、図の上の部分に段を有し、ひっかけ椀の部分であると考えられる。色調は黒褐色。3トレンチの東側の溝の覆土から出土している。

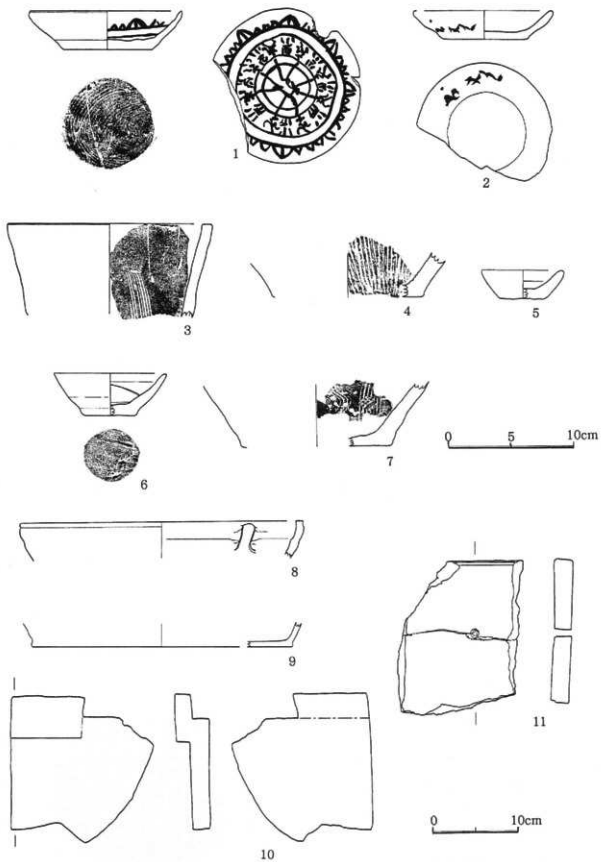
11は瓦の接合個体である。焼成は比較的良く、しっかりしている。中央部に釘穴と思われる穿孔が見られ、色調は淡褐色を呈する。1トレンチの溝状遺構の覆土から出土している。

12～24には陶磁器類をあげた。

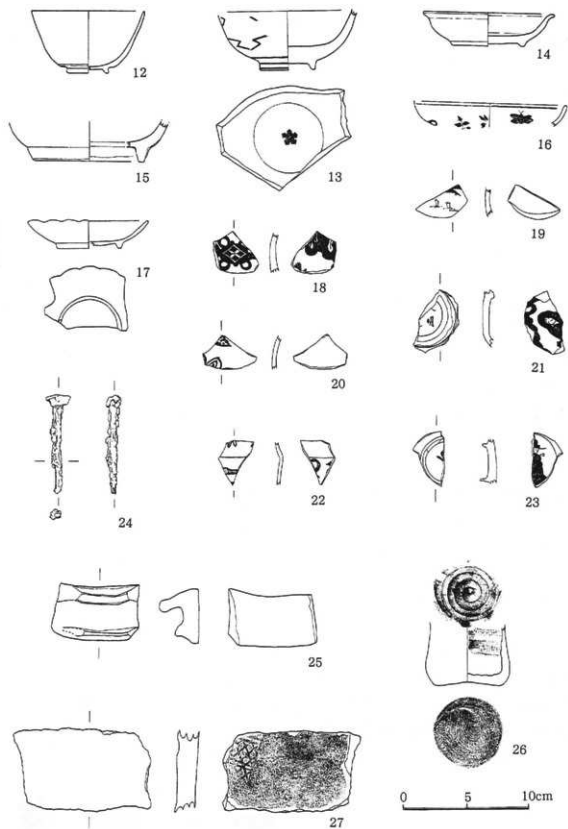
12は高台付碗である。口径9cm、底径3.2cm、器高4.9cmを計る磁器質の茶碗である。



写真6 出土遺物（輪宝墨書土器）



第5図 館林城跡（三の丸）（平11地点）出土遺物実測図（1）



第6図 館林城跡（三の丸）（平11地点）出土遺物実測図（2）

13は磁器質の高台付碗である。底径4.4cm、現高4.8cmを計る。表・内面に藍色の絵付けがされている。

14は磁器質の高台付皿。完形品で底径5.6cm、器高2.7cmを計る。緑色の釉がかかる。5トレンチ西側にある木炭が充填された遺構より出土している。15も磁器質の高台付き皿の破片。底径8.8cm、現高3.1cmを計る。16は磁器質の皿、口縁の破片。表面に草、内面に虫の絵柄が見える。17は磁器質の高台付き皿破片。紋様はないが、口唇部が波形を呈する。

18～23は磁器、染付の破片。19には内面に帆掛け船の図柄が見られる。

21と23は高台付きのもので、21には内面に女性の図柄が見られ、底部には「明」の字が見える。23の内面には男性の図柄があり、底部にはやはり文字が見られる。21と23はどちらも4トレンチから出土しており、一対のものであるかもしれない。

24は角釘である。現存する長さは7.8cmを計る。錆びているが、頭の部分が付き、断面は四角形を呈する。ほぼ完形品で瓦釘か。3トレンチの東側にある溝より出土している。この溝からは多くの角釘が出土しているが、本報告では本品のみ実測した。

25は瓦質の陶器であるが、器形は不明である。大きさは、縦4.5cm、現存する横が6.8cm程で、上縁部と下縁部は鈎状に張り出しており、断面は凹状となる。内面は平らである。色調は黄褐色。2トレンチの井戸から出土している。

26は陶器底部の破片。底径5.4cm、現高5cmを計り、色調は茶褐色。内面の底にはロクロ痕が、底部には糸切り痕が見られる。1トレンチの溝から出土。

27は瓦の破片である。裏面に菱形の敲き目が見られる。4トレンチから出土している。

以上、今回の調査で出土した遺物の代表例を図示したが、陶磁器類等の時代を特定をしていないことから、直接館林城に関わるものかどうかは明確にされていない現状である。今後時間をかけて、整理、精査を行っていくつもりである。



写真7 出土遺物 (1)



写真8 出土遺物 (2)



写真9 出土遺物 (3)

第2節 八 方 遺 跡 (平11地点)

1. 立 地 と 環 境

八方遺跡(18)は、館林市の北部、東武鉄道佐野線「渡瀬」駅の西方約0.5kmのところ、渡良瀬川の沖積地に突出する舌状台地上に所在する古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。

これまでに数回の発掘調査が実施され、古墳時代の住居址や大型の有段遺構等が検出されており、古墳時代を中心とした集落跡であることがわかっている。

本市のほぼ中心にある邑楽・館林台地の北側には、渡良瀬川の形成した沖積地が広がっており、沖積地内には旧河道と考えられる窪地や、これに添って、自然堤防状の高まりが見られる。また、邑楽・館林台地の北辺には、台地より一段低いテラス状の高まり(ローム層が確認される)が見られることが多い。

また、台地と低地の境は、台地の南側ほど浸食をうけておらず、比較的崖状に低地に移行する場面が多い。

本遺跡はこうした邑楽・館林台地の北部に所在する遺跡で、本遺跡周辺の地形を見てみると、本遺跡の載る台地は、市街地の中央の館林・邑楽台地から、北の渡良瀬川の沖積地に半島状に延びる、幅150mほどの馬背状の舌状台地で、台地の西と東は渡良瀬川が形成したと考えられる沖積地に囲われており、沖積地との比高差は2mほどある。

本遺跡の西側には沖積地を隔て、邑楽・館林台地の本体および内陸河群砂丘とよばれる自然堤防がみられ、東側には、旧河道に添う自然堤防が見られる。

本遺跡で調査確認された、住居址や大型有段遺構等の主要な遺構は、舌状台地の中央部から斜面にかけて構築されており、本遺跡の中心部は舌状台地の中心部にあるものと考えられている。

本遺跡周辺の遺跡をあげると、渡良瀬川の大きな沖積地をはさんで西側の台地上に、縄文時代の住居址が発掘されたほか、古墳～平安の土器片が多く散布する岡野・屋敷前・岡遺跡(16)がある。

また、南側の邑楽・館林台地の北斜面に、縄文時代や平安時代の遺物が確認された大街道遺跡(31)、東に縄文時代の遺物を散布する朝日町遺跡(34)、南に古墳時代の墳墓である愛宕神社古墳(32)が所在し、台地全体には近世の城跡である館林城跡・城下町(32)が広がっている。

北及び東側の渡良瀬川の沖積地中には、旧河道が蛇行して確認され、これに添ってある微高地に、平安時代の遺物が散布する広内町1遺跡(35)、広内町2遺跡(36)や中世城館址である蛇屋敷跡(17)が所在している。



写真10 遺跡遠景



第7図 八方遺跡周辺の遺跡

2. 調査の概要

本地点の発掘調査は、地権者の子息大塚順丈氏によって計画された、館林市岡野町字八方19-1(809㎡)における個人専用住宅建設に伴う、試掘・確認調査である。

調査は、計画地の地形にあわせ東西方向に幅1mの試掘溝を3本設定(北より1~3トレンチ)し、重機により表土を排除したのち、人力により掘り下げ遺構・遺物の確認を行った。

調査地の現地形は、東から西にむかって傾斜している場所であるにもかかわらず、すでに西側には砕石がおかれ、ほぼ平坦となっていた。

調査地の旧地形は、トレンチの東側で表土下30cmのところでもローム面を確認したが、西側では180cm掘り下げてもロームを確認できなかったことから、東から西に向かってかなり傾斜している状況が確認された。

1トレンチでは、東側で現表下30cmでローム層を確認したが、西側では確認できなかった。

2トレンチでは、中央部で楕円形のやや黒い土が確認され、土器片等も出土したことから、遺物を残し掘り下げたが、ローム面が西に向かって急におちこんでおり、土器片等が集中したものであろうと判断された。

3トレンチでは東部分で表土下50cmでローム層を確認したが、西側では現表下180cmでもローム層は確認できず、深さ1m以上の砕石が敷かれていることが確認できた。

本調査地では遺物はいくつか確認できたものの、遺構を確認できなかったことから、工事については支障なしと判断した。

出土遺物には小破片がある。



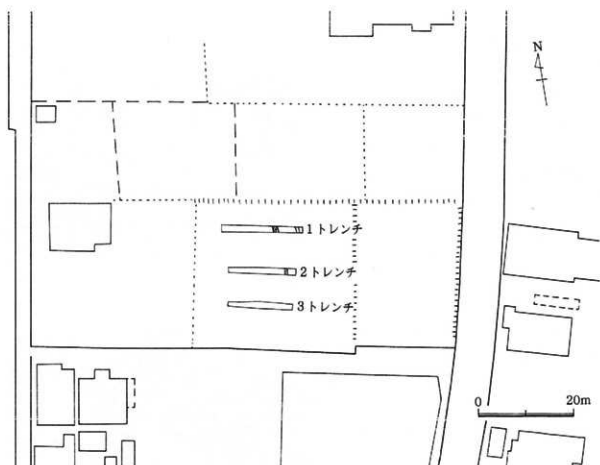
写真11 調査区近景



写真12 調査風景



写真13 完掘状態(3トレンチ)



第8図 八方遺跡（平11地点）調査区全体図

3. 出土遺物

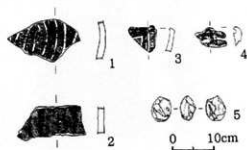
今回の調査によって出土した遺物は少ない。次に採拓できたものを取り上げた。

1~4は縄文土器の土器片である。

1は深鉢の胴部破片で地紋に縄文を施し、竹管による沈線がある。2は深鉢胴部破片で縄文のみ。

3、4は深鉢の口縁破片。口唇部に突起があり、いずれも磨り消し縄文を施す

5は磨石である。



第9図 八方遺跡（平11地点）出土遺物実測図



写真14 出土遺物

第3節 加法師遺跡（平11地点）

1. 立地と環境

加法師遺跡（39）は、館林市市街地の北東部、館林市役所の北方約0.8kmのところ、渡良瀬川の形成した沖積地に突出する舌状台地上に所在する縄文時代～古墳時代の遺物を出す遺跡である。平成8年度にその一部が調査され、縄文時代中期の住居址が確認されている。

本遺跡は、邑楽・館林台地の東北辺に位置する遺跡である。邑楽・館林台地の北側には渡良瀬川の沖積地が広がっており、沖積地には旧河道と思われる窪地とそれに添って自然堤防の微高地がちなっている。

台地と低地の境は、崖を作っていることが多く、台地に接して一段低くテラス状の高まりがあることが多い。

本遺跡周辺は、この境が明確でなくなる部分でもあり、台地から緩やかに傾斜して自然堤防に移行するところに本遺跡は所在している。

加法師遺跡の載る舌状台地は、館林市街地の中央部に位置する邑楽・館林台地から、渡良瀬川の沖積地に延びる比較的幅の広い、平坦な舌状台地である。

遺跡周辺の旧地形は、邑楽・館林台地から、北側に向かって緩やかに傾斜して沖積地に移行するものと思われ、先端は自然堤防の微高地へと連なっている。

遺跡は、この舌状台地の中央部から、北傾斜に所在するものと考えられている。

館林城の武家屋敷街や城下町の北側を囲む土塁や外堀の遺構とも重なっており、本調査地における城下町の堀や土塁は、この舌状台地の末端を掘削・盛土し設けたものと考えられる。

本遺跡周辺の遺跡は、本遺跡と同様に、邑楽・館林台地上および台地から北にのびる傾斜にかけて、縄文時代の遺物が散布する外加法師遺跡（144）、朝日町遺跡（34）が、また古墳時代の住居址が発掘された尾曳町1遺跡（40）、古墳時代の土師器が散布する尾曳町2遺跡（62）が所在し、城沼を望む南斜面に、市指定史跡「山王山古墳」を含み古墳時代の遺物を散布する善長寺付近遺跡（41）が、邑楽・館林台地上に奈良時代～平安時代の土師器が散布する城町遺跡（38）があり、台地全体に近世の城跡である館林城跡・城下町（33）が広がる。

また、遺跡の北側には、渡良瀬川の沖積地が広がっており、この沖積地中にある微高地上に平安時代の遺物を散布する若宮遺跡（37）、広内町1遺跡（35）、広内町2遺跡（36）が所在している。



写真15 遺跡遠景



第10図 加法師遺跡周辺の遺跡

2. 調査の概要

本地点の発掘調査は、開発者有限会社平工務店によって計画された館林市加法師町2438他、無番地を含む8筆（10,526㎡）の宅地分譲計画に伴う、試掘・確認調査である。

本地域での開発計画は、平成5年度まで遡り、何回か、個人による開発が計画されてきたが国有地（水路）払い下げの問題で許可されなかった。

今回の開発計画は、こうしたものを取りまとめ、周辺も含めて広範囲に宅地分譲しようとするものであった。

調査は開発面積が大きかったことから、区域内全体に10m間隔で幅1mのトレンチを設定し（東から1～18トレンチ）重機によって表土を排除し、その後、人力により土層を観察しながら掘り下げ、遺構・遺物の確認を行った。

調査地中央には旧館林城の土塁跡（平成7年に調査済）と堀跡があり調査地はこれにより二分されており、便宜上堀より北を1区、南を2区とした、現状は1区は水田、2区は土塁部分が荒地、他は畑となっていた。

1区は2区より約80cmほど低くなっており、田



写真19 遺物出土状態（10トレンチ）



写真16 調査地近景



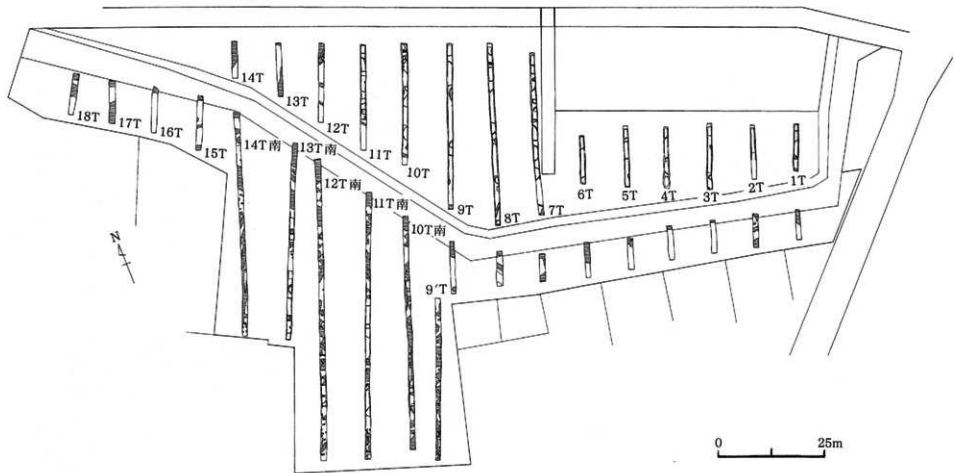
写真17 調査風景



写真18 遺物出土状態（2トレンチ）

及び畑となっていた。

調査によって1区では地表下約40cmで、2区では約15cmでローム面が確認され縄文時代を中心として出土遺物も多く見られ、各所で住居址と考えられる落ち込みも多く確認されたことから、その保存について、保存区域をさだめ、開発予定者と協議をおこない盛土で現地保存する方向とし、現地保存出来ない部分については原因者負担のもと記録保存をすることとした。



第11图 加法師遺跡(平11地点)調査区全体图

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は膨大な量にのぼる。今回図示したのは、そのごく一部であり、垣間見た程度で、全体の接合等は未処理である。

1は縄文土器深鉢の口縁から胴部である。残存状態は3分の2程度。口径29.5cm、現高20.5cmを計る。器形はキャリパー状を呈し、口縁部から肩部にかけて隆帯や渦巻きで区画され、地紋に縄文を施す。頸部から胴部は縄文の地紋に太い沈線の懸垂文が施されている。焼成は良好、色調は淡橙褐色、胎土に細砂粒を多量に混入している。10トレンチから出土。

2は縄文土器深鉢の口縁から胴部にかけての2分の1個体。口径23.5cm、現高15.5cmを計る。器形はキャリパー状を呈するが、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は無紋、肩部は隆帯と沈線により区画され、地紋に縄文が見られる。頸部から胴部にかけては縄文。焼成良好で二次焼成痕が見られる。色調は淡～灰褐色、胎土に細砂粒を混入する。8トレンチから出土。

3は甕の3分の2個体。口径13.2cm、頸部径9.5cm、胴部最大径17.6cm、底径6cm、器高20.2cmを計る。器形は口縁部は直線的に外反し、頸部は「く」の字にくびれ、胴部は緩やかに膨らみ、ほぼ中央部に最大径をもち、緩やかにすぼまって底部に至る。焼成は良好、色調は明赤褐色、胎土には砂粒を多量に含む。調整は表面がヘラ削りの後櫛ナデ、内面はヘラナデである。8トレンチから出土。

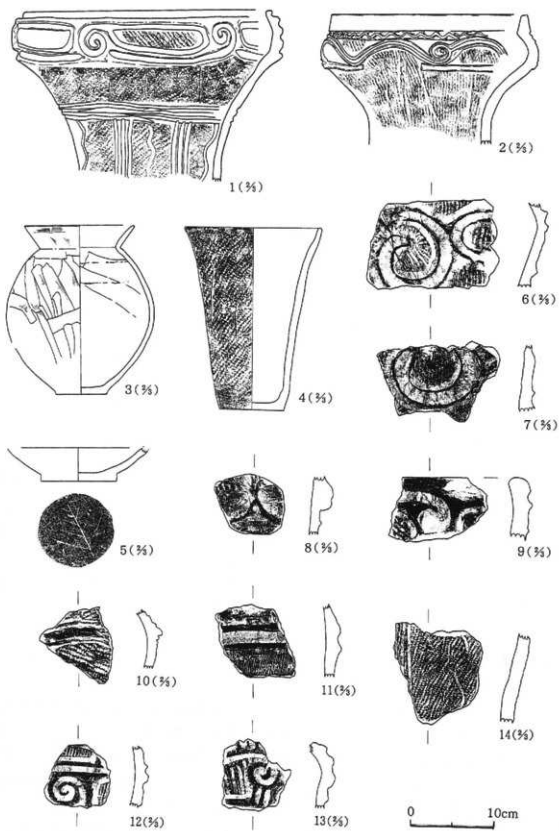
4は縄文土器深鉢完形個体。口径16.5cm、底径7.6cm、器高21.8cmを計る。器形は最大径を口縁部に持ち、直線的にすぼまって底部に至る。全面に縄文を施す。焼成は良好、色調は表面が淡褐色。内面は黒色。胎土には白色砂粒を含む。12トレンチの南側から出土。

5は壺の底部破片。底面に木葉痕が残る、弥生土器の破片か。4トレンチから出土。6は縄文土器深鉢の肩部破片。隆帯による渦巻き状の紋様、地紋は沈線。7も同様。6と同一個体か。7トレンチから出土。

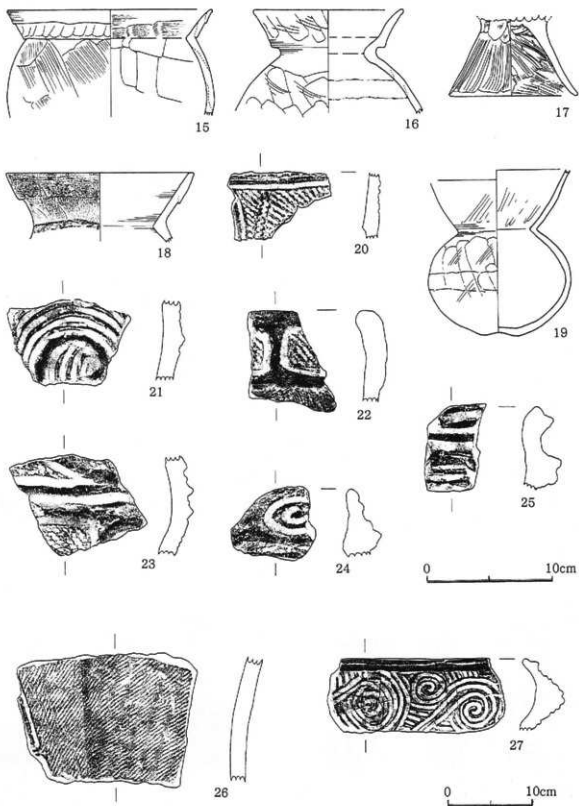
8は縄文土器深鉢の肩部破片。隆帯による区画の部分、地紋に縄文。7トレンチ出土。9は縄文土器深鉢の口縁部破片。太い隆帯と沈線による渦巻き状の紋様、地紋に縄文を施す。5トレンチ出土。10は縄文土器深鉢胴部破片。太い隆帯と沈線、地紋に縄文。7トレンチ出土。11は縄文土器深鉢の胴部破片。断面に凹部のある太い隆帯、地紋は沈線。10トレンチ出土。12、13は縄文土器深鉢肩部の破片。いずれも太い隆帯と渦巻き状の沈線で区画し、地紋に平行沈線が見られる。12は11トレンチ、12は10トレンチの南部分から出土している。14は縄文土器深鉢の胴部破片。地紋は縄文、直線と波線の沈線の懸垂文が見られる。10トレンチの南部分出土。

15は甕の口縁から肩部にかけての2分の1個体。口径16.5cm、頸部径13.5cm、胴部最大径16.5cm、現高8.5cmを計る。口唇部は折り返し状に段をなし、口縁部は直線的に外反、頸部は「く」の字にくびれ、胴部は緩やかに膨らみ最大径を胴部中央に持つものと考えられる。焼成は良好、胎土に細砂粒、金雲母を多量混入し、色調は表面が黒褐色、内面は灰褐色を呈す。調整は、表面の口縁は指ナデ、指押し、胴部はハケ目で、内面は口縁が櫛ナデ、胴部はヘラナデである。5トレンチより出土している。

16は壺の口縁から肩部にかけての3分の1個体。口径12cm、頸部径7cm、残存する胴部の最大径は15cm、現高8.2cmを計る。口縁部は折り返し口縁、内湾する。頸部は「く」の字にくびれ、緩やかに外弯しながら膨らんで胴部に至り、胴部中央付近に最大径を有するものと考えられる。焼成は非常に良好、胎土は緻密で粗砂粒を少量混入する。色調は赤褐色を呈する。調整は、表面はヘラ削り、ヘラナデ、内面は



第12图 加法師遺跡（平11地点）出土遺物実測図（1）



第 13 图 加法師遺跡 (平 11 地点) 出土遺物実測图 (2)

口縁部がへら削り、へらナデ、胴部は指ナデである。2トレンチから出土している。

17は台付き甕の脚部である。底径10.3cm、現高6cmを計る。脚部は緩やかに内弯している。焼成は良好、胎土に砂粒を多量に混入し、色調は表面淡褐色、内面は赤褐色を呈する。5トレンチ出土。

18は壺の口縁部から頸部にかけての個体である。口径15cm、現高5.5cmを計る。口縁は折返し口縁でほぼ直線的に立ち上がる。頸部は「く」の字にくびれている。焼成は良好、胎土に砂粒、小石を多量に含み、色調は淡褐色を呈する。調整は表面上部が横の櫛ナデ、下部が縦の櫛ナデ、内面は指ナデである。2トレンチ出土。

19は埴。ほぼ完形個体で口唇部を破損している。口径は現存する部分の最大径で11cm、頸部径11.4cm、胴部最大径11.4cm、底径3cm、現高13.5cmを計る。口縁部は緩やかに内弯して立ち上り、頸部は「く」の字状にくびれ、胴部は球状となる。底部はやや上げ底。焼成は良好、胎土は細砂粒、白色砂粒を多量に混入し、色調は赤褐色を呈す。調整は表面はへら削り、へら磨きが見られ、口縁の内面はへら磨きである。8トレンチ出土。

20は縄文土器深鉢胴部破片。太い沈線、地紋は縄文。11トレンチ出土。21は縄文土器深鉢胴部破片。沈線と隆帯による渦巻き状の紋様。7トレンチ出土。22は縄文土器深鉢口縁破片。太い隆帯と沈線による区画文。地紋に縄文。11トレンチ南部分出土。23は縄文土器肩部破片。太い隆帯と沈線による区画が見られる。地紋に縄文。24、25は縄文土器浅鉢の肩部破片と考えられる。いずれも隆帯と沈線によって紋様が構成されている。24は11トレンチ、25は5トレンチ出土。

26は縄文土器深鉢胴部破片。一部に沈線が見られ、縄文が施されている。12トレンチ出土。

27は縄文土器深鉢口縁の破片。口縁は2段口縁。沈線による渦巻き状の紋様を施す。渦巻きは乳状に膨らんでいる。



写真20 出土遺物(1)



写真21 出土遺物(2)



写真22 出土遺物(3)



写真23 出土遺物(4)

第4節 北近藤第一地点遺跡（平11地点）

1. 立地と環境

北近藤第一地点遺跡（53）は、館林市街地の西南方、近藤沼に面する洪積台地上に所在する古墳時代から平安時代にかけての集落である。

本遺跡内の発掘調査は過去数回実施されており、数多くの古墳時代の住居址が発掘されており、この時代の集落跡であったことがわかっている。

本遺跡周辺の地形は複雑で、邑楽・館林台地の南側を谷田川が東流し、その周辺には沖積地が発達しているが、この沖積地から北の洪積台地に向けて大小の支谷が多く入り込んでいる。

近藤沼は、洪積台地を刻む比較的大きな深い谷にできた池沼であり、この谷に向けても大小の谷が形成され台地を浸食しており、舌状台地を多く作り出している。

本遺跡は、邑楽・館林台地南部の沖積地に近藤沼の北側の台地上に位置している遺跡で、この近藤沼から延びる深い谷の左岸の台地上に所在しており、遺跡の載る台地は、比較的平坦で広い台地で、遺跡は、南に近藤沼を望み、東側に近藤沼から北に延びる深い谷（近藤川）に、北は同じく近藤沼から北に延びる浅い谷によって区切られている。

現在の谷との比高差は5mほどある。

近藤沼周辺に所在する遺跡は多く、大小の支谷に面する舌状台地には必ずといっていいほど人間の生活痕を見いだすことができる。

本遺跡周辺の遺跡には、近藤沼から延びる深い谷に面して、本遺跡と同じ台地上に、古墳時代の住居址が発掘調査されているほか、縄文時代から古墳時代の土器を産する伝右エ門遺跡（52）が、谷に隔てた東の台地上に、上流部より、縄文時代の遺物が確認されている北小袋遺跡（54）、縄文時代、古墳時代、平安時代の遺物が見られる小袋遺跡（55）、平安時代の遺物が出土する苗木西遺跡（94）、古墳時代、平安時代の遺物が確認できる苗木遺跡（95）がある。またその東の浅い谷を隔て、縄文時代、平安時代の遺物を産する萩原遺跡（98）、中世から近世にかけての城館址と伝えられる青柳城跡（99）が見られる。

また本遺跡の西に広がる台地上には、小さな谷を隔てて、古墳時代から平安時代の住居址が発掘されている南近藤遺跡（91）や土器器を出土する北近藤第二地点遺跡（92）があり、近藤沼を隔てた南側の台地上には平安時代の遺物を出土する稲荷前遺跡（93）が所在している。



写真24 遺跡遠景



第14図 北近藤第一地点遺跡周辺の遺跡

2. 調査の概要

本地点の発掘調査は、地権者新見 清氏他2名によって計画された、館林市苗木町字北近藤2507-1他9筆(4,393㎡)の立木伐採及び整地に伴う、試掘・確認調査である。

今回の計画は、現地が雑木林になっていることから野鳥の棲みかとなっておりその数も非常に多く、フン害がひどく周辺の住民から苦情がでており、これに対応するため、今後の土地利用は未定であるものの、樹木伐採を行い整地したいというものであった。

調査は計画地が広いこと、また調査地が国道354号によって分断されていることなどから、二時期に分けて行った。便宜上、国道より北をA区、南をB区とした。

A区は調査対象区域も小さい(478㎡)ことから、整地にあわせ東西方向に幅1mのトレンチ3本を設定(北からA-1～A-3トレンチ)し、重機により表土を排除したのち、人力により掘り下げ、遺構・遺物の確認を行った。

B区は調査対象区域も大きい(3,915㎡)ことから、地形に合わせて、東西方向に幅1mの試掘溝を10m間隔で設定(北からB-1～B-13トレンチ)し、重機により表土を排除したのち、人力により掘り下げ、遺構・遺物の確認を行った。

調査地は台地の東斜面であることもあって、現状でも西側と東側は比高差が大きいところで1.5mほどあるが、旧地もこれと同じように、西から東へ向かってかなり傾斜している様子が確認できた。

ローム面までの深さは調査地の東側では表土下15cm程、西側では1m以上となり東側の低地へと移行している。旧地形の比高差は最大で5mほどとなる。

確認された遺構は、A区では古墳時代後期と考えられる竈を有する住居址2軒、B区では同時期と考えられる住居址26軒、その他溝などの落ち込みを



写真25 A区調査地近景



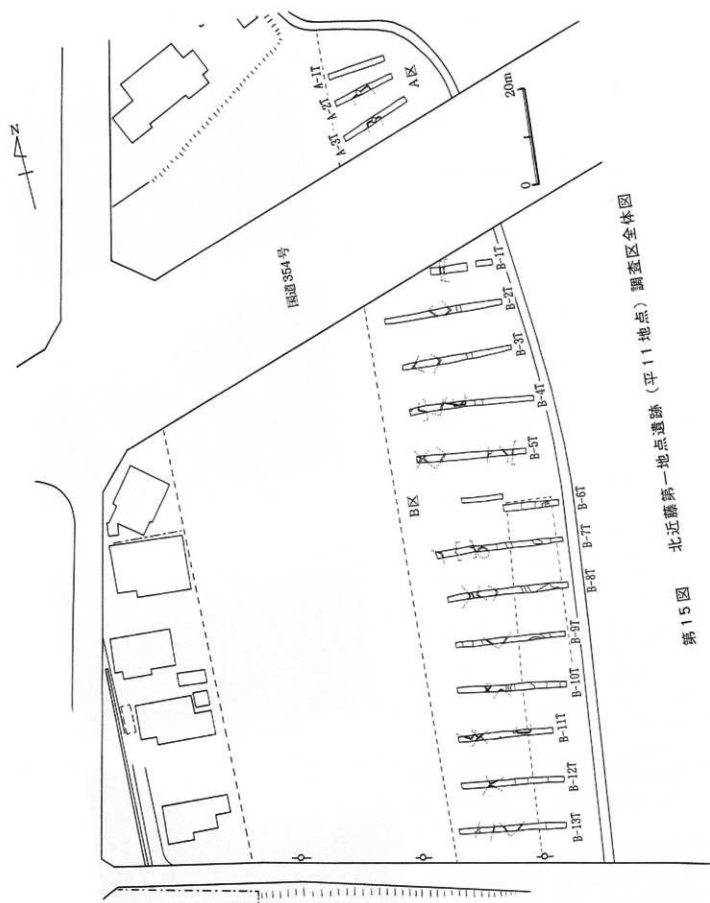
写真26 B区調査地近景



写真27 調査風景 (A区)



写真28 調査風景 (B区)



第15图 北近畿第一地点選跡(平11地点)調査区全体図



写真29 遺構確認状況(A-2トレンチ)



写真30 遺構確認状況(B-5トレンチ)



写真31 遺構確認状況(B-9トレンチ)



写真32 遺物出土状況(A-2トレンチ)



写真33 遺物出土状況(B-4トレンチ)

確認した。

住居址は、そのいずれもが調査区東側の比較的平坦な地域に所在している傾向を示している。

市では、住居址等の遺構や多くの遺物が確認されたことから、その保存について、代理人等と協議を進めたが、その協議中に遺跡の一部が掘削されるという行為が発生してしまった。

その後の処理については、県教育委員会と協議中である。

3. 出土遺物

今回の調査において出土した遺物は多い。このうち本書では、一括などとして出土したものの一部を掲載した。

1は土師器の甔、ほぼ完形の個体である。口径27cm、底径9cm、器高29.5cmを計る。器形は、最大径を口縁部に持ち、緩やかに外反して頸部に至り、ゆるやかに内湾して底部に至る長胴の甔である。焼成は良好で、胎土に粗砂粒を多量に含み、色調は、表面は黒色、口縁部と内面は明褐色を呈する。調整は、口縁部が内外面とも指ナデ、胴部表面はヘラ削り、胴部内面はヘラナデである。B区8トレンチの住居址と考えられる落ち込みから出土している。

2は土師器の甔、3分の1ほどの個体である。接合復元が未処理であるため、3分の1ほどであるが、完形の土器に復元できるものと考えられる。口径20cm、頸部径16cm、胴部最大径28cm、現高25cmを計る。口縁部はやや外反して立ち上り、頸部でくびれ、胴部は球状に膨らんで胴部中央に最大径を持ち、すぼまって底部に至るものと考えられる。焼成は良好、胎土は均質で細砂粒を混入する。色調は表面淡褐色、内面橙褐色を呈す。調整は口縁部は内外面とも指ナデ、胴部は表面ヘラ削り、内面ヘラナデである。B区8トレンチの住居址と考えられる落ち込みより出土している。

3は土垂の完形品である。管状の土垂で、長さ6.5cm、直径3～3.3cmを計る。焼成は良好、胎土には粗砂粒を多量に混入し、色調は暗褐色を呈す。B区13トレンチの住居址と考えられる落ち込みから出土。

4は磨石の破片。石材は白黄色の軽石を用い、矢柄研磨と思われる溝が表に2条、裏に1条見られる。B区9トレンチの住居址と考えられる落ち込みより出土している。

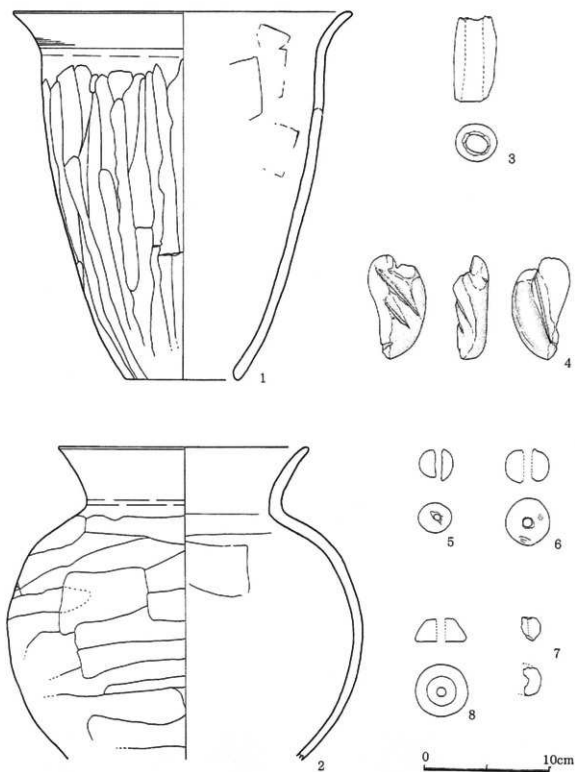
5～7は土玉。5と6は完形。7は破片。5は径2.5cm、7は長径3.7cm、単径2.5cm程である。7は約半分の破片。いずれも焼成は良好、胎土に細砂粒を含み、5と7は暗褐色、6は黒色を呈する。5はB区4トレンチの住居址と考えられる落ち込みから、6と7はB区8トレンチから出土している。

8は紡錘車である。完形で大きさは径4.2cm、厚さ1.9cmを計る。材質にはピンク色の滑石を使用し丁寧に仕上げられている。

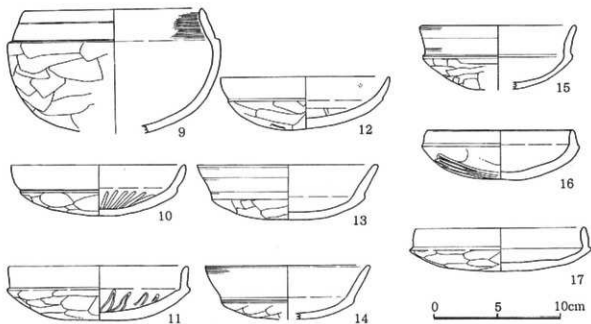
9は土師器甔の3分の1個体である。口径11.4cm、最大径17cm、現高9.8cmを計る。器形は、口縁部は内側に傾斜しほぼまっすぐに立ち上り、肩部（頸部）で段を持つ。胴部は球状となり底部にいたるものと考えられる。焼成は良好、胎土は粗砂粒を多量に混入する。色調は表面が橙褐色、内面は赤褐色を呈する。調整は、口縁が指ナデ、表面がヘラ削りの後指ナデである。B区8トレンチから出土。

10～17はいずれも土師器坏である。

10はほぼ完形個体。口縁部を一部欠損する。口径13.8cm、器高4cmを計る。口縁はやや内反して立ち上がる。肩部に段を有し、内湾してすぼまり、底部に至る。焼成は良好で、胎土に粗砂粒を多量に混入、色調は明橙褐色を呈し、表面にはススが付着する。調整は口縁指ナデ、表面がヘラ削り、内面はヘラ磨きである。B区5トレンチの住居址と考えられる落ち込みから出土している。11は2分の1個体。口径14.5cm、器高4.3cmを計る。口縁はほぼ垂直に立ち上り、肩部に段を持ち、一気にすぼまって底部に至る。焼成は良好、胎土に細砂粒、雲母を混入している。色調は黒褐色を呈し、調整は口縁が指ナデ、表面ヘラ削り、内面はナデ、ヘラ磨きが見られる。B区11トレンチより出土。12はほぼ完形個体。口縁を一部欠損している。口径13.4cm、器高4.2cmを計る。焼成は良好胎土に粗砂粒、小石を多量に含む。色調は明橙褐色、調整は



第16图 北近藤第一地点遺跡（平11地点）出土遺物実測図（1）



第17図 北近藤第一地点遺跡（平11地点）出土遺物実測図（2）

口縁部指ナデ、表面にヘラ削りが見られる。B区4トレンチの住居址と考えられる落ち込みから出土している。13は完形個体。口径14.8cm、器高4.3cmを計る。口縁は外反し直線的に立ち上がる。肩部に段を有し、内湾して底部に至る。焼成は良好、胎土に粗砂粒、小石を多量混入。色調は淡赤褐色。調整は口縁指ナデ、表面にヘラ削りが見られる。B区5トレンチの住居址出土。14は4分の1個体。口径13.0cm、現高4.2cm。口縁は外反、肩部に段を有する。焼成良好、胎土に細砂粒、金雲母多量混入、色調は淡褐色で調整は口縁指ナデ、底部はヘラ削り。B区8トレンチ出土。15は2分の1個体。口径12.4cm、現高5.1cm。口縁外反、肩部に段を有する。焼成良好、胎土に粗砂粒を含む。色調は明橙褐色。調整は口縁指ナデ、表面にヘラ削り。B区7トレンチの住居址出土。16は完形個体。口径11.5cm、器高3.9cmを計る。口縁はやや内反し、肩部に段を有する。焼成良好、胎土に粗砂粒を多量に混入。色調は暗褐色、調整は指ナデ、ヘラ削り、ヘラ磨き。B区4トレンチの住居址出土。17は5分の3個体。口径13.5cm、器高3.4cmを計る。口縁はほぼ垂直に立ち上がり、肩部に段を有し、やや扁平。焼成良好、胎土に細砂粒混入。色調は暗～淡褐色。



写真34 出土遺物（1）



写真35 出土遺物（2）

抄 録

ふりがな	たてばやししないせきはくつちょうさほうこくしょ										
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書										
副書名	_____										
巻次	_____										
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書										
シリーズ番号	第35集										
編集者名	岡屋英治										
編集機関	館林市教育委員会										
所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町1-1										
発行年月日	西暦 2000年 3月 31日										
ふりがな	な	な	コ	ー	ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	ふ	り	市	町	村	遺跡番号					
館林城(三の丸)	城	町	1207			33	-	-	1999 1999	2,446 m ² 公共事業	
平11地点											
八	方										
平11地点	岡野町	字	八	方		1207	18	-	-	1999 1999	809 個人住宅
加	法	師									
平11地点	加	法	師	町		1207	39	-	-	1999 1999	10,526 宅地開発
北近藤第一地点	苗	木	町	字	北	近	藤				
平11地点						1207	52	-	-	1999 2000	4,393 伐採整地
遺跡名	種別	時代	主な遺構			主な遺物			特記事項		
館林城(三の丸)	城館跡	江戸	敷石状遺構 溝 井戸等			輪宝墨書土器 瓦片 陶磁器片 等					
平11地点											
八	方										
平11地点	集落址	古墳	なし			土師器片 等					
加	法	師									
平11地点	集落址	縄文~古墳	縄文時代中期住居 古墳時代中期住居等			縄文時代中期深鉢 土師器 等					
北近藤第一地点	集落址	古墳	古墳時代後期住居			土師器 等					
平11地点											

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第35集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館 林 市 教 育 委 員 会
印 刷 所 オ ー ラ 印 刷 有 限 会 社
発行年月日 平成12年3月31日



文化財堂標シンボルマーク

世界の文化と歴史をみなおそう